

生きることは解放されつつづけること

玉光順正

はじめに

今日、大学の門のところで「学事部はどこですか」と聞きましたら、そこにおられた方が「何のご用ですか」と、「宗教講座に来たんですが」と言いますと、「宗教講座ですね、聴講に来られたんですか」「いや、実は話をする方です」と言うと、びっくりされて「あっ、先生ですか」。こういう恰好で来たので、多分、先生はネクタイをして来るだろうと、こういうことをひょっとしたら考えておられたのかなと思います。私はそういう思い、そういう感覚から解放されることが大事なことかと思っています。

ともかく今日は「生きる」とは解放されつづけること」ということで、今、考えていることをお話ししてみたいと思います。私は一九四三年生まれで六〇歳を超えました。皆さんの三倍ほど生きています。しかし三倍生きているからといって三倍何かを知っている、深く生きた、という自信は全くないわけです。「生きる」とは解放されつづけること」と言いましたが、皆さんと水平に出会い、互いに新しい出会いの中で考えてみたいなというつもりでやってみりました。解放されつづけること、最終的にはそういうことになるわけですが、生きるということを「出会いつづけること」「学びつづけること」「愛しつづけること」「願いつづけること」、そういう話をしながら最終的に「解放されつづけること」と行けばと思っています。

出会いつづけること

皆さんも二〇年ほど生きてこられて、その間に出会いということはある意味では体験し、そういうことを考え続けてこられたことだろうと思いますが、「生きることは

生きることは解放されつづけること

出会いつづけること」というのはどういうことか。生まれた時からずっといろんな人、モノ、自然と出会いつづけている。生まれた時、お母さん、お父さん、家族、病院で生まれると病院の先生とか、人と出会い、その後、家族や近くの人がお祝いに来てくださって育っていくわけです。最初の間はほとんど覚えていないわけです。これが自分のお母さん、お父さんだとはわかりませんが、とにかく出会いつづけています。少し大きくなれば保育園、幼稚園に行くようになって、学校に行き、そこで友だちに出会ったり、先生に出会ったりします。小学校、中学、高校、大学と先生や友だちと出会っていきます。皆さんもいろんな人と出会って来ているわけですが、就職すれば、そこでまた上司、同僚と出会う。いろんな人と出会い、自然と出会い、出来事と出会う。今日は宗教講座と出会う。そういうことの中でいろんな出会いを、人とか自然、モノとの出会いの中で生きていきます。出会いつづけるということは、出会うことが終わった時が死ぬ時であるということです。亡くなるとすべての出会いが終わってしまう。私たちはある意味、出会いの中で今の自分がつくられているということでもあります。今日の自分はこれまでどんな人に出会ってきたのか。どういう出来事に出会

ってきたのか。そういうことの中で今の自分ができています。言い換えれば人間は人を食べながら生きている。いろんな人と出会い、その人を食べながら生きてきているとも言っていいかもしれません。

交わり、関係の中で人間はできていくわけです。交わりの中で人格がつくられていく。それは逆に言えば、自分がまだ出会っていない人、出会ったことのない出来事があるから、今の自分でしかないということがあります。今の自分はこれまで出会ったことよってつくられたのだけど、もっと本当に出会わなければならぬ人、出会わなければならぬ出来事と出会っていないから今の自分でしかないということも考えられます。これから皆さん方がどういうふうに出会っていかれるか、その中で一つ考えてみたいことは、自分にとって出会うというのは、自分がこれまで見たことのない人、見たくない人との出会いが多分、大事なこととなるのではないかと思います。

―見えない人、見たくない人

私の紹介の中でハンセン病のことがでてきましたが、ハンセン病は最近、らい予防

生きることは解放されつづけること

法の廃止、九七年から裁判とか、テレビで報道されることも多く、皆さんもハンセン病元患者の方が出ておられるのをご覧になったかと思います。そういうことについて学校でもお話を聞かれたことがあるかもしれません。ハンセン病の人たち、元患者の人と出会い、支援をされたことがあるかもしれません。私は二〇数年前に初めてハンセン病の療養所を訪ねました。その頃、ハンセン病のことを「らい」と呼んでいました。「らい」病は怖い病気だと、出会ってもいけないのに、さまざまなことを教えられていました。それが療養所に行くことによって、元患者の人たちと出会うことによって、自分のそれまで考えていたことが全く変わっていくという経験をしました。同時にその人たちと出会うことによって、私が変わっていくということがありました。

また別のことで言えば、二〇年ほど前になりますが、ある獄中におられる人に出会わなければならぬことがあります、大宮拘置所へ行ったことがあります。その時とても緊張しました。普通は獄中におられるような人と出会うことはほとんど無いわけです。普通の生活では、無くて当たり前だと考えられています。ですから普通は、あえてそういう人たちと出会うことをほとんどしない。しかし私はある時、死刑廃止

運動を考える中で獄中の人々と出会うことを友人とともに思いつき、「獄中の人々を憶う会」をつくりました。その時ある人が私たちにこういうことを言いました。「犯罪者と犯罪者でない人があるわけではないんです。あなたたちはまだ罪を犯していないだけです」と。それを聞いて私はなるほどな、とびつくりしました。そういう出会いというのは、これまで考えていたこと、ごくあたりまえにしていたことをひっくり返すような出会いです。これは私たちにとつてとても大事なことだと思えます。そうでないと、私たちは普通に考えている限り、いつでも多数の側、強者の側に立ってしまう。そのことが今の日本をつくっているように、自分では意識していなくても多数の側、弱い人たちの側が見えなくなる。見えない人とか、見たくない人々と出会うということがとても大事なことはないかと思えます。

獄中の人々と言いましたが、この学校も浄土真宗、親鸞聖人の教えのもとにつくられた学校ですが、親鸞の言葉に「煩惱成就」というのがあります。あらゆる人間には煩惱が成就している。煩惱は貪り怒ったり、愚痴を言ったり、妬む心とか、人間はそれがすべて成就している。もう少し言い換えれば人間はどんなことでもする。たとえ

生きることは解放されつづけること

ば自分が人を殺すとか、人のモノを盗るとか、ウソをつく、そんなこともしてしまっても、いろんな事件が起こった時、子どもが子どもを殺すとか、一〇年ほど前のオウム真理教の事件とか、池田小学校の事件とかが起こると「自分はああいふ犯罪とは関係がない」と私たちは思います。たとえば、もしかすると私たちも人を殺すこともあるとは考えない。「そんなことはあるはずがない」と。池田小学校の事件で死刑が執行されました。宅間さんという被告であった人が処刑されたんですが、「ああいうことと自分とは関係がない」と普通は思っていますが、そのことが実は「煩惱成就」ではなく「煩惱不足」です。普通、「自分はそんなことはしない、あんな悪い人はいない」と考えてしまう。しかし見えない人、見たくない人と出会うことによって、そういうこと全体をもういっぺん見直すことができ、私たちがもう少し変わってくるだろうと思っています。

氷山の一角という言葉があります。私たちは生きている時は自分の持っている煩惱の10分の1くらいしか使っていません。それは可能性でもあるんですが、自分がこれまで出会ったことがない人と出会うことによって自分の可能性、普段使っていない煩

悩の10分の9の部分を広めていくことが大事なこととなるだろうと思います。これまで自分が出会っていない人と出会う、これまで出会いたくなかった人とあえて出会ってみる、そういうことが「生きるということが出会うということ」と考えますと、大事なことではないかと思えます。自分ではそのことによつて、少しはそういう人間の可能性、どんな人でも、どんな世の中を起こる悪いことでも「自分と関係のないことではない」ということを少しでも知ることが大事なことのように思います。

学びつづけること

次に「生きるということは学びつづけること」ということですが、学ぶということがあまり好きでない人が結構多いですね。しかし学ぶということは、本当はとても楽しいことだと思えます。人間が身体を動かすことが楽しいことであるように、学ぶということも、今日こうして話を聞いているわけですが、話を聞くことも脳のどこかを動かし、心を動かすということになれば、とても楽しいことになるはずです。しかし、

生きることは解放されつづけること

私たちはこれまで、学ぶということは覚えることであつたり、暗記することであるような学び方をしてきたことによつて、学ぶということの楽しさを忘れてきたのではないかと思います。学ぶということは、自分がこれまで見えなかつた自分に気づいて、新しい自分に気づくことでもあります。そういう意味で、学ぶことの楽しさを取り戻すことも大事なことだと思います。

子どもたちを見ますと好奇心のかたまりです。「あれ、なに？　これ、なに？　空はなぜ青いの？」とか大人にわからないような質問をよくすることがあります。学ぶということとは一つの事件ですね。何か新しいことを聞き、アレツと思う、そういうことは事件であり、出来事である。そのことを先人は万劫の初事といいました。人間が生きていくことは学びつづけることであるということだと思います。

私たちは誰でもそうですが、自分が学ぼうとしなくなれば、それを押しつけます。私も子どもに対していろいろなことを押しつけます。押しつけるといことは自分が学ぼうとしなくなつた時、いろいろなことを押しつけていくのだと思つていきます。

願いつづけること

次に「生きることは願いつづけること」。友人からの手紙の中にメモの形で詩が入っていました。それは「女は願いです」という言葉で始まり「女は数千年を願いを紡いで生きてきました」とありました。それを見た時、「女は願いです」というのは何となくわかるような気もする、と同時にそういう意味では、「人間は願いだ」と。そういうもので生きているということがあると思います。しかし今はそういう願いといふことでなくなってきた。願いというのは私たちにとって時間的に言えば長いスパンで考えるべきことだと思います。先日、あるところからダイレクトメールが来まして、寺にこういうものを買ったらどうかとカタログが届きました。その中に一輪挿しのコップに「今、ここ、自分、その合計が自分の一生」と書いてありました。なるほどな、と思いました。こんなの書きそうな人の名前を知っていますか。相田みつをさんの言葉です。「今」という時、「ここ」という場所、そしてそこにいる「自分」、それを皆、

生きることは解放されつづけること

足していくと自分の一生になる。あたりまえの話ですが、ただ「今、ここ、自分」というだけでは「願い」ということが考えにくいと思っています。実は本当は「今、ここ、自分」の背景、バックグラウンドにあるものをきちっと考えながら生きるということが大事なことで、それを「願い」と言おうと思います。

—今

日本人の時間観念はほとんど「今」のことしか考えない。政治家を見てみるとよくわかりますが、日本の政治家で一〇年後とか、五〇年後、一〇〇年後のことを考えている政治家はほとんどいません。考えているのはせいぜい次の選挙のことくらいです。昨日も小泉さんが韓国へ行つて、盧武鉉大統領と話をしました。聞いてみますと、小泉さんが考えているのは、まさに「今、ここ、自分」です。韓国の大統領はむしろ歴史、隣の国のことを考えている。「今」というのは歴史です。「ここ」というのは隣の国、国と国との社会的展開です。そういうことを抜きにして「自分」のことしか考えていないのが、どうも今の日本の政治家の多くの人たちではないか。次の選挙でどう

なるかということだけしか考えていない。

昨日、それを見ていて思ったんですが、皆さんは、政治のことをどういうふうに考えますか。靖国神社に小泉さんが行く、行かないことについて、一昨日、BSでそのことについて韓国の若者と日本の若者八人ずつが討論していました。それを見ていて、両方の国の二〇歳代の人たちですが、とてもいい感覚だなと思ったんですが、皆さんは靖国神社へ小泉さんが行くことについてどんな意見がありますか。そういうことについて考えたことのある人、手を挙げてみてください。約2%ですね。それに対して、今、韓国の人たち、中国の人たち、国の状況は違うんですが、日本の首相の靖国参拝について考えている彼らのパーセンテージはかなり高いように思いますね。

そういうところでどういうことが起こっているのか。私たちの日本の時間というのはほとんど狭い意味での「今」のことしか考えていない。本来、「今」というのは過去のことに對してどう考えるのか。未来についてどう考えるのかを含めて「今」ということを考えることです。そういうことをぜひ考えてほしいと思います。「ここ」のことを考える時、日本という国を考える時、隣の国のことを考える。日本という国は

生きることは解放されつづけること

アジアの小さい国です。しかし私たちは今、私もそうですが、皆、洋服を着ています。こういうものはわずかに一三〇年、長く見積もって、それくらいです。明治以降になつて私たちはヨーロッパ、アメリカの真似をしました。それまではアジアの文化、漢字もそうですが、私たちの文化は皆、アジアの文化です。食べるものもどんどん変わっていったわけです。百数十年前までは日本はすべて衣食住ともにアジアの文化だったところが一二〇、一三〇年の間に「脱亜入欧」という、明治時代の政策で、アジアを脱して欧米、アメリカ、ヨーロッパの仲間入りをする政策を進めた。その「脱亜入欧」というのを唱えた人が福沢諭吉です。聖徳太子と福沢諭吉の共通点を挙げてください。一万円札、ピンポン。一万円札が聖徳太子から福沢諭吉になりました。これには深い政策があります。これとアジアから脱してヨーロッパの真似をすることと関係がある。聖徳太子はアジアからの文化、仏教の文化を中心にして日本の文化をつくってきた人です。そういうもつとをつくった人の一人です。それを福沢諭吉に変えた。そういうことの中にも今の日本の全体がアジアから出て、ヨーロッパ、アメリカの仲間入りをしようということが具体的に見えてきます。

日本は明治まではアジアの国だった。アジアの小さい国。明治になって、脱亜入欧の政策がとられた。黒船が来てびっくりしたということもあります。その後、どうなったか。象徴的に言いますが、日清、日露戦争がありました。こういうことを通してアジアから脱して、ヨーロッパ、アメリカの仲間入りをしようとい英同盟が結ばれます。日本とイギリスが日清戦争後の一九〇二年、同盟を結びます。それが第一次世界大戦まで続きます。その後、一五年戦争、太平洋戦争では日本が中国をはじめアジア諸国を侵略する戦争を始めます。この時は鬼畜米英、アメリカとイギリスは鬼畜生だという言葉を使いました。戦後、今度は日米同盟で日本とアメリカが仲良くする。その前は鬼畜米英だったわけです。今、どうなったか。国際連合はアメリカとイギリスとロシアとフランスと中国が常任理事国です。イラク戦争の時、アメリカが主導してアメリカとイギリスだけがイラク戦争を始めました。その時、いち早く乗ったのが日本です。今、アメリカとイギリスと日本がイラク戦争のある意味で中心になりました。ロシア、中国、フランス、ドイツはイラク戦争に反対しました。今、世界の状況の中で日本とアメリカとイギリスは特別な位置にあります。そういうことのもとが「脱亜

生きることは解放されつづけること

入欧」ということの中にあります。

この大学でも中国、韓国からの留学生の方がおられるかもしれませんが、そういう人たちに対して、私たちの感覚はヨーロッパ、アメリカの人たちへのものとはどうも違う。ヨーロッパ、アメリカの人たちに対してコンプレックスとは言わないまでも、何かしら相手が進んでいると感じる。日本はそこについていって、アジアの中では日本が一番優れているという感覚が、私たちや私たちの後の世代の人たちにも、あるように思われます。そういう感覚をつくったのが「脱亜入欧」という思想です。できれば、私たち自身を変えるためには、中国や韓国、朝鮮、東南アジアの人たちと出会うことによって、私たちの国が、今、どういう方向を向いているのか、そんなことを知ることが大事なことだと思います。

愛しつづけること

次に「生きることは愛しつづけること」ですが、愛するということとは本当の意味で

他者を発見するということ、他者を認めるということ。もつとも深く相手を認める。皆さんのお母さん、お父さんに聞くと、自分の子どもが変わる時があると言います。それは子どもが恋をした時、すぐわかると言います。それは人を愛することによって自分を変えようとする。自分を魅力あるものに見せようとしていきます。愛することはとても大事なことです。ただ問題は愛ということは愛することではなく、愛しつづけることが大事なんです。愛することよりも愛しつづけること。なかなか難しい。皆さん、これから結婚されると思いますが、私は時々、結婚式に呼ばれてスピーチを頼まれると、必ず言うことがあります。「愛することは錯覚でもできるけれども、愛しつづけることはなかなか難しい。愛しつづけるためには、自分が変わりつづける、学びつづけることが常にないと、なかなかできない」と話します。皆さんの親御さん、お母さん、お父さんが、今、愛しつづけているかどうか、機会があったら一度聞いてみてください。「愛することは相手のことを知ること、相手を尊敬することだ」と言ったのはエーリッヒ・フロムです。私は坊さんをしていまして、時々、話を頼まれて、皆さんのおばあさんたちの年代の人たちにこういう話をする、皆キョトンとした顔

生きることは解放されつづけること

をして「愛ということは昔すんだことだ」というような顔をされます。愛という言葉は若い人の言葉だと思っています。しかし親鸞という人は、信心のことを「欲願愛悦の心」と言いました。愛することは親鸞のいう信心でもあります。愛するということはいろんな言い方がされますが、「相手を喜ばせることができる一切の事柄の総計」と言った人がいます。また、「愛することは待つことです」と言った人もいます。徹底して待つ。愛することではなく、愛しつづけることを覚えておいてください。なかなかうまくいきませんが、とても大事なことだと思います。

愛することは他者の発見、最も深く他者を認めること。夫婦であっても、恋人同士でも愛しつづけることがなければ単に風景になります。人と人との関係が風景になる。風景は自分のために人があるということ。いつでも私たちが互いに学びあい、変わり合う感覚がなくなったら相手が風景になる、モノになってしまいうことがあるかと思えます。

解放されつつづけること

最後に「生きることは解放されつつづけること」ということですが、解放という言葉は自由、平等ということを獲得することです。今は昔より便利な時代、快適な時代になつてきました。ある時、若い女性が「玉光さん、そう言われるけど、私たちの世代は解放されることをあまり考えたことがない。もう自由だ。何にも縛られていない。自由だから解放されている」と言った。果たして本当に解放されているのでしょうか。そうでもないような気がします。解放は関係の中で言われることです。関係の概念です。自由に何でもできるということが解放ということではない。田舎でも町でも独居老人と言われるように、一人でいる人が一杯います。その人たちはある意味では気楽な生活、自由に好きなことを好きな時間に行っているように見えますが、それは気楽ではあるが、解放されているとはあまり思えないことがあります。解放とはどういうことか、もう少し考えてみなければならぬと思います。

生きることは解放されつづけること

京都に岡部伊都子さんという随筆家がおられます。長年、書きつづけてこられ、今八〇歳を超えておられます。今年のはじめに京都におられる鶴見俊輔さんとの対談を本にされました。その中に「私たちは若さからも解放されましたね」という言葉がありました。若いということに何かこだわる、そういうことから解放されたということでもあります。皆さんはそんなことはおよそ考えたことはないと思いますが、結構若い人でも「年取った」と言う人がいますが、それは若さから解放されていない。和田稠さんという年配のお坊さんがいますが、「死ぬということは肉体から解放されることだ」と、肉体から解放されることが死ぬということだと言っています。そういう意味では出会いがなくなることが死ぬことだと言いましたが、自分の肉体、食べたり出したりする肉体からは死ぬまで解放されないわけですが、死ぬということは肉体からも解放されることだと和田稠さんは言います。さっき「今、自分たちは解放されてしまっている」と言った女性の話をしましたが、本当にそうだろうか。私たちが持っている常識というものから解放される、知的解放についてお話しして終わりたいと思います。

—他人が見えない

私はもう二〇年ほど前、小学校のPTAに代理で出席した時の話ですが、二つほど後輩の人がこういうことを言いました。「自分は子どもに三つのことをいつも言いつづけている。その三つのことは何かというと、他人に迷惑をかけるな、人さまに迷惑をかけることをしない。もう一つは人さまの役に立つ人間になれ。もう一つは人間は健康が第一。この三つのことをずっと言いつづけています」と言われたお父さんがいました。皆さんの中にもお父さん、お母さんから、そういうふうに言われて育てられた人がいるかもしれません。「他人に迷惑をかけるな」「人の役に立つ人間になれ」「人間は健康が第一」。この三つのことを言いつづけてきているとおっしゃった。その時、アレツと違って、そのことについて言ったことがあります。

人に迷惑をかけるなど言うけれども、人間が生きているということは迷惑をかけて生きているとしか言いようがない。いろんな意味で人間が他人に迷惑をかけないで生きるということは基本的にはないことです。いろんな人に迷惑をかけて生きています。

生きることは解放されつづけること

魚を見たら私たちは「うまそうだ」と言ったり、感じたりします。「この魚はうまそうだ」。しかし、魚は人に食べられようとして生まれてきたわけではない。水俣の緒方さんという漁師さんが「自分は泥棒だ」と言われました。なぜかというところ「魚は勝手に大きくなってきた。別に餌をやったわけでもないのに、漁に行つて魚をとつてきて売る。自分は泥棒だ」と。他のものに迷惑をかけないで生きているということはないわけです。皆に迷惑をかけて生きている。その時に「人に迷惑をかけるな」と教えたら、大きくなるまで「自分は人に迷惑をかけていけない」と思つて育つてしまうかもしれない。

「人さまの役に立つ人間になれ」。これも人の役に立つていると思つている人間ほど、人に迷惑をかけている人間はないと思つています。多くの政治家を見ていると「自分は人さまの役に立っている」と思つているだろうけれども、果たしてそうなのか。「人さまの役に立つ人間になれ」と言うより、「人間というのは人の邪魔をしてしか生きていけないんだ」と考えた方がいいかもしれません。

「人間は健康が第一だ」。そのことは間違つていないことではないんですが、そのこ

とを徹底して言いますと、健康でない人は悪いと考えてしまいます。そういうことより「病氣の時はきちつと病氣になったことをうけとめることの方が大事ですよ」と教えた方がいい。これはどういうことかというところ「人に迷惑をかけるな」「人さまの役に立つ人間になれ」「人間は健康が第一」と教えることは何かということですが、そういうふうに教えると、徹底して相手が見えなくなる。他者が見えていない生き方、独断的に自分の考えしかない駄々っ子になります。これは今の日本の私たちの年代も含めて駄々っ子が多いのは、こういうことです。「人に迷惑をかけるな」「人さまの役に立つ人間になれ」「人間は健康が第一である」ということをお父さん、お母さんに言われて育ってきた人間は、他人のことを考えない。他人が見えない生き方しかできなくなります。そういう意味で、皆さんが、もし、親になった時には、こういうことを言わないようにしてほしいと思います。これだけ覚えて帰っても、今日来たことはとても大変な値打ちがあります。

こんなことを親鸞は「日ごろのこころにては往生かなうべからず」といつています。「往生」という言葉は、解放されつづけることといつていいと思います。

生きることは解放されつづけること

もう一つは、こういうことをすると「ごめんね」ということが言えなくなります。今、田舎でも問題になっているのは、一人で生きていくしかなくなって、皆、介護保険とか問題が出てきていますが、「ごめんね、一緒に生きていこうね」ということが言えなくなっている。もう一つ言いますと、解放されつづけることは苦悩することです。常識から解放されると言いましたが、つれあいが、こんなことを言ったことがあります。二人の姉妹だったんですが、「自分は子どもの時から、二人姉妹仲良く、友だちとも仲良く、家族も仲良く、結婚したら夫婦仲良く、親子も仲良く、と言われて育ってきた」。皆、そうですね。日本の常識は、きょうだい仲良く、友だちも仲良く、家族は仲良く、親子仲良く、夫婦仲良くとして育ってきたけれども、それは何年かは続くかもしれない。五年、一〇年と続くかもしれないけど、時にはいろんなことが家族の中、夫婦の中、友だち同士で、妬みや仲違いをすることが一杯あります。その時、仲良くしなければならぬと教えられるのではなく、仲良くしなければならぬと思えば思うほどよけいに嫌になってしまふことがあるように、「いろいろあるよ。本当は一人ひとり皆、違うのですよ」ということをきちつと教えてもらうことの方が大事

だと思えます。人間は一人ひとり、皆、違うんですよ。

おわりに

ある時、「これまで人類始まって以来、同じ人間は一人もいない」と言われて、びつくりしたことがあります。そんなこと、あたりまえじゃないかと考えますが、人類始まって以来、私という人は一人です。同じ人間はいないということはとても大事なことです。ある意味では仲良くできないこともあるし、仲違いすることもある。しかしそういうことをきちつと忘れないで、それは時間をかけないといけないこともありますが、苦悩する、苦しみ悩むことを大事にすることを教えていくことが大切です。苦悩することを私たちは本当に大事にしていくと、苦悩が転ずる。そういうことを「解放されつづけること」ということで表現してみようと思つて、お話をさせていただきました。

日本という国は大変な状況になりつつあります。皆さんに近い年代の人たちが戦争

生きることは解放されつづけること

をして、そこに参加しなければならぬようなことが、ひよつとしたら起こるかもしれないような状況が来ております。そんな中で一番大事なことは「今、ここ、自分」ということだけでなく、過去のこと、未来のことを考えながら今を生きる。隣の人、隣の国のことを考えながら今を生きる。そしてそういうことを隣の人に語っていく、そういうことを是非していただきたい。もつともつと歴史ということを学んでいただきたいなど。日本の首相が靖国神社に参るとか、参らないとか、それがどうということなのか、ちよつと勉強すれば、すぐわかることです。そんなことも含めて、皆さんの世代にいろんなことを期待して、話を終わりたいと思います。ありがとうございます。

—二〇〇五年六月二日—